

共通教育科目としての「自然体験活動」の効果に関する一考察 ～自由記述レポートによる質的検討～

川畑和也・福満博隆

キーワード：共通教育科目、大学体育、社会的スキル、野外教育、テキストマイニング

I. 緒言

近年の若者をめぐる問題として、対人関係を構築し、維持する能力を身に付ける機会の減少が就労上の不適応を生じさせていることや、社会や上司、同僚とうまく付き合うことができない新入社員が増加していることが報告され、若者の心理社会的不適応の問題が取り沙汰されている¹⁾。Benesse 教育研究開発センターが行った「社会で必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」²⁾の中では、社会で求められる力として「問題解決力」、「継続的な学習力」、「主体性」、「チームワーク力」などが上位に挙げられ、これらの社会で求められる力を学生は獲得していないことも報告されている。つまり社会全般では、これまで以上に他者との円滑な関係性を構築し、様々な課題に対応する力の重要性が言われ、対人関係を円滑に進める技能である「社会的スキル」³⁾の醸成が必要とされ、高等教育機関である大学教育の中でも重要視されている。

大学教育の中でもそのような力の醸成が必要とされ、「教養・共通教育」科目として、大学審議会⁴⁾や中央教育審議会大学分科会⁵⁾などで繰り返し教養教育の重要性が提言されている。教養教育は、変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力として総括され、学ぶことやよく生きることへの主体的な態度を身につけ、何事にも真に取り組む意欲を育てていくことや、個人が生涯にわたって新しい知識を獲得し、それを統合していく力を育てることを目指すもので、教養の涵養にとって、異文化との接触が重要な意味を持つということが特に重視すべき観点として挙げられている⁶⁾。これらの教養教育において、各大学では様々な取り組みを行い、鹿児島大学では、共通教育として鹿児島大学と提携している市町村にある自然学校を活用した、「自然体験活動入門講座」という科目を開講している。

キャンプなどの自然体験活動は、現代的な青少年の様々な課題に対応するものとして、心理的側面や社会性の向上といった個人の成長の場や学校や地域、家庭での体験不足を補う場、人と人との根本的な関わりを通して直接的に人間関係のあり方を見直す場としてなど、様々な可能性を秘め、社会が抱える諸問題を解決するための手段として、その有効性が期待されている⁷⁾。さらに、文部科学省中央環境審議会は、平成25年1月の答申の中で、体験活動が豊富なほど、意欲や関心、規範意識などへ好影響を及ぼすことが報告され、キャンプ経験によって、様々なスキルの獲得に影響を与えることが考えられる。これまで大学における自然体験活動の教育効果については、社会的スキルの観点から、吉田（2009）が短期大学生を対象とした一泊二日のキャンプ実習で、社会的スキルの初歩的なスキルの向上に有効であったことを述べ⁸⁾、また西田ら（2002）は、円滑な人間関係を営むために必要なスキルである向社会的スキルの向上に効果があったことを報告している⁹⁾。さらに、テキスト型データを計量的に分析するテキストマイニングを用いた研究事例では、吉松（2015）が、大学生を対象とした共通教育科目「アウトドア」の授業の中で、質問紙調査やレポートの分析から、大学生の社会人基礎力に肯定的な影響を及ぼしたこと、特に各種の実践的内容が「行動に移す力」が身についたという認識に、グループ学習によって「協働

する力」が身についたという認識につながったことを報告している¹⁰⁾。

しかし、これらの研究では活動直後の結果にとどまり、自然体験活動での社会的体験を大学生活や日常生活場面の中に一般化する場合、ある特定集団のみの関係性に着眼するのではなく、その後の生活場面での対人関係における、技術の獲得、維持・向上への影響を検討する必要がある。また、これまで社会的スキルの獲得についてテキストマイニングを用いてその効果を検討したものは見られない。

そこで本研究では、共通教育科目として行われた自然体験活動入門講座の受講者を対象に、社会的スキルの変容を検討し、テキストマイニングによる分析を行うことで、実習におけるどのような要素が学生の社会的スキルの獲得に寄与しているのかを検討することを主たる目的とした。

II. 方法

1. 調査対象

平成28年8月23日(火)～25日(木)に行われた、平成28年度鹿児島大学共通教育「自然体験活動入門講座」及び、平成29年8月31日(木)～9月2日(土)に行われた平成29年度に参加した一年生75名(男性42名、女性33名)である。尚、実施プログラムは、平成28、29年度共に同様のものである。

2. 実施方法

(1) 授業の概要

本自然体験活動入門講座は農学部高隈演習林に隣接し、垂水市と鹿児島大学が提携している垂水市大野ESD自然学校(旧大野小学校跡)をベースキャンプにして、2泊3日の日程で行われた。学習目標として、1)人間と自然の関わりについて考える機会となる、2)自分と他人との関わりについて考える機会となる、3)自分自身について考える機会となる、4)生活技術や野外活動技術を学ぶ機会となる、の4点を挙げている。高隈の森の自然を利用した自然体験活動を通して、自然との触れ合いを深め、仲間と協力して成し遂げる喜びを体験し、自分の可能性について見つめ直す場としている。また、宿泊は全てテント泊であり、食事は7食中5食自炊を行った。

班編成に関しては、できるだけ学部学科が異なるように調整し、平成28年度は1班10人の男女混合4班編成、平成29年度は1班9人の男女混合4班の編成とした。それぞれの班に、班長、副班長、食事係、薪係、装備係の役割を設けた。

講義内容は、1日目にアイスブレイクや冒険的要素を含む課題を解決していく協力ゲームを行い、テント設営や野外炊事、ナイトプログラムを行った。2日目は午前中に野外炊事やネイチャーゲーム、講義のメインプログラムとして午後からは沢登りとキャンプファイヤーを実施した。3日目は竹林から学生自らが竹を切り出し竹細工を行い、昼食の流しそうめんを使用する、ルール、器、箸作りを実施した。昼食後の振り返りの時間ではスタッフが作成した3日間を振り返るスライドショーの上映を行い、グループと個人でのふりかえりの時間を設けた。また、毎晩班ごとのミーティングの時間を設定し、その日の出来事や翌日への抱負などをグループ内で共有させた。また、食事に関しては7食中5食野外炊行い、宿泊に関しては2日間とも野外でのテント泊であった(図1)。

1日目	2日目	3日目
設営と動的なアクティビティ	動的なアクティビティ	静的なアクティビティと撤収
集合	野外炊事	撤収
閉講式	ネイチャーゲーム	クラフト
設営	沢登り	振り返り
協力ゲーム		閉講式
		解散
野外炊事	特産BBQ	
ナイトプログラム	キャンプファイヤー	
振り返り	振り返り	

図1 共通教育科目「自然体験入門講座」のプログラム

(2) 運営スタッフ

2泊3日の活動において、両年度の講義が同様に行われるように、指導・運営に関しては鹿児島大学共通教育センター教員、自然学校職員、一年次にこの講義を受講し、三年次に子どもキャンプの企画、運営に関わった経験のある3年生と4年生の学生がスタッフとして運営に携わった。また生活班の活動において、学生スタッフを2名ずつ各班に配置した。

3. 調査時期及び方法

(1) 質問用紙

調査用紙は、①個人プロフィール（受講年度、学籍番号、性別）、②社会的スキルに関する項目を含む構成とした。

被験者の社会的スキルに関する項目は、菊池（1988）によって作成された、若者の社会的スキルを測定する尺度である Kikuchi's Scale of Social Skills 18 items（以下、Kiss18）を用いた。尺度は全18項目からなり、5件法（1：全く当てはまらない～5：全く当てはまる）で回答させ、その合計を社会的スキル得点とした。また、尺度は6つの下位因子からなり、それぞれ「初歩的なスキル（3項目）」、「高度なスキル（3項目）」、「感情的なスキル（3項目）」、「攻撃的なスキル（3項目）」、「処理的なスキル（3項目）」、「計画的なスキル（3項目）」であった。それぞれの得点に関しては、得点が高いほどスキルが高いことを示す。

(2) 自由記述レポート

自由記述レポートは、「この実習を振り返って学んだことや感じたこと」というテーマで、実習終了後文章データでの提出を求めた。なお、このレポートは、実習の記録として、活動写真などと一緒に製本され、振り返りの会時に学生に配布されるものである。

(3) 調査時期

社会的スキルに関しては、参加学生に対し実習前の事前オリエンテーション時（Pre）と実習最終日閉講式時（Post1）、さらに実習終了後8週間後に行われた事後オリエンテーション時（Post2）にて実施し、回答に不備が出ないように直接配布した上で一斉に回答させた。

自由記述レポートに関しては、参加学生に対し実習終了後「3日間を振り返って」というテーマのレポートを課題として設け、2週間以内での提出を求めた。

(4) 分析

社会的スキルの分析に関しては、Pre-Post1-Post2の時期に参加学生に対して行なった調査結果を、5段階評定尺度に基づき各因子ごとに得点化し、3つの時期で一元配置分散分析を行った。統計処理には、解析用プログラム IBM SPSS Statistics 23を用いた。

自由記述レポートに関しては、記述内容はテキストデータにして分析を行い、分析処理には、KH-Coderを用いた。この時、文意を変えないように留意した上で、綴りの間違いや入力ミスなどの修正を行った。また、同じ意味をあらわす言葉でも漢字、ひらがな、カタカナなどの表記の違いが起こり、使用される表現に統一性が保証されないことが多いことから、質の高い結果を得ることのできるように、不統一な表現を解析ソフトの類義語辞典に登録し、まとめ、それを反映させたキーワード抽出を繰り返し行った。

IV. 結果と考察

1. 回収率

講義受講生75名に対し調査を行ったが、事前・事後オリエンテーションに参加できなかった者や、回答内容に欠落する項目が多かった者などが存在し、平成28年度は回収率100.0%（40名；男性：25名、女性：15名）であり、平成29年度は94.3%（33名；男性：16名、女性：17名）であった。なお、2年度分の回収率は97.3%（73名；男性41：名、女性：32名）であった。

2. 社会的スキルの変容

自然体験活動における参加学生の社会的スキルの変容を検討するために、Pre、Post1、Post2で平均値及び標準偏差を示し、一元配置分散分析を行った（表1）。

表1 実習前後、8週間後における社会的スキルと下位因子の変容

指標	Pre		Post1		Post2		分散分析		多重比較		
	M	SD	M	SD	M	SD	F-value	p	Pre-Post1	Pre-Post2	Post1-Post2
社会的スキル得点	56.75	8.30	62.47	10.77	65.63	8.69	26.98	***	***	***	*
初歩的なスキル	9.59	2.77	9.97	2.48	11.12	2.20	11.90	***		***	**
高度なスキル	9.42	1.80	10.75	2.37	11.11	1.70	20.58	***	***	***	
感情的なスキル	8.96	1.83	10.08	2.14	11.04	1.87	33.25	***	***	***	**
攻撃的なスキル	9.60	2.12	10.49	2.21	11.05	2.12	12.07	***	**	***	
処理的なスキル	9.48	2.07	10.26	2.10	10.75	1.90	10.82	***	*	***	
計画的なスキル	9.70	2.22	10.90	2.47	10.55	1.99	9.88	***	***	**	

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

その結果「社会的スキル (F=26.98, p<.001)」で有意な変容が示された。さらに、多重比較を行ったところ、「社会的スキル」はPre(56.75)-Post1(62.47)間、Pre(56.75)-Post2(65.63)間、Post1(62.47)-Post2(65.63)間で有意な差が示された。つまり、自然体験活動経験が参加学生の社会的スキルを向上させ、講義後の生活においても有意な向上に影響することが示唆された。このことは、自然体験活動を通じた他者との生活の中で、共同作業を行い、気持ちを共感や援助的な関わり合いを行うことができ、それらを学ぶ機会となったことがスキルが向上した要因として考えられる。また、体験型の学習においては、実際の体験、ふりかえりを含む観察、概念化、積極的な実験と繋がる一連の流れであり、これら4段階の過程で起こる学びはもっとも効果的であるという体験型学習サイクルの重要性が言われているが、その後の生活においても向上が見られたことは、体験学習サイクルが構築され、毎晩のグループミーティングや最終日の振り返りの時間など、講義の中で経験し獲得したスキルを一般化しやすく、さらにそれらを試行する機会に恵まれていたことが考えられる。

同様に下位因子においても検定を行ったところ、「初歩的なスキル (F=11.90, p<.001)」、「高度なスキル (F=20.58, p<.001)」、「感情処理スキル (F=33.25, p<.001)」、「攻撃に代わるスキル (F=12.07, p<.001)」、「ストレス処理のスキル (F=10.82, p<.001)」、「計画のスキル (F=9.88, p<.001)」にも有意な変容が示された。さらに多重比較を行ったところ、それぞれのスキルで有

意な変容が示された。「初歩的なスキル」は、Pre(9.59)-Post2(11.12)間、Post1(9.97)-Post2(11.12)間で有意な差が示され、講義直後に向上は示されなかったが、その後の生活で向上したことが示された。「初歩的なスキル」は他人との会話や円滑なコミュニケーションをとることにに関するスキルであるが、自然体験活動を通して初対面の相手との生活や成功体験などを通してスキルを獲得でき、本講義での経験が、その後の生活で積極的に他人と会話しコミュニケーションをとることを容易にさせることが推察された。

「より高度のスキル」は、Pre(9.42)-Post1(10.75)間、Pre(9.42)-Post2(11.11)間で有意な差が示され、講義直後に向上し、維持されることが示された。「高度なスキル」は、他者への依頼や謝罪などに関するスキルであるが、本講義の中で、他者との協力や挑戦、工夫といった試行錯誤の中で生活を送る必要があったことが影響したことが考えられる。

「感情処理のスキル」は、Pre(8.96)-Post1(10.08)間、Pre(8.96)-Post2(11.04)間、Post1(10.08)-Post2(11.04)間で有意な差が示され、講義を通して向上したスキルが、講義後の生活においても有意に向上することを示す結果となった。感情処理スキルは、自制心や感情表現などに関するスキルであるが、3日間の自然体験活動を通し、寝食を共にする仲間との良好な関係が築かれることで、自分の感情や気持ちを素直に表現することや他者を受け入れることができたことが講義後の向上につながり、その経験がその後の生活で、一般的な他者に対しても同様に接することができたことが影響したと考えられる。「攻撃に代わるスキル」は、Pre(9.60)-Post1(10.49)間、Pre(9.60)-Post2(11.05)間で有意な差が示され、これらのスキルは講義直後に向上し、その後の生活においても維持されることが示された。攻撃に代わるスキルは、他者とのトラブル処理、他者の援助に関するスキルである。集団と個人、集団内の個人における相互作用に関するグループダイナミクスの考えの中で、グループが初めて形成される形成期から、目的、各自の役割と責任について意見を発するようになり、対立が生じる混乱期、規範意識が確立し、他人の考え方を受容し、目的、役割、期待などが一致し、チーム内の関係性が安定する時期である統一期を迎えることが述べられているが、今回の講義でも同様に、混乱期、統一期を迎えグループとして成熟していく過程の中で、他者とのトラブル処理、他者援助の機会を得たことが影響していると考えられる。さらに「ストレスを処理するスキル」も、Pre(9.48)-Post1(10.26)間、Pre(9.48)-Post2(10.75)間で、有意な差が示され、これらのスキルは講義直後に向上し、その後の生活においても維持されることが示された。ストレス処理のスキルは、矛盾した情報の処理、集団圧力への対応などのに関するスキルであるが、初対面の相手や自分とは違った考えを持つ他者や、多くの情報を処理、判断して過ごす3日間の生活がストレス処理のスキルを向上させることに影響したと考えられる。また「計画のスキル」に関しても、Pre(9.70)-Post1(10.90)間、Pre(9.70)-Post2(10.55)間で有意な差が示され、これらのスキルは講義直後に向上し、その後の生活においても維持されることが示された。計画のスキルは、問題の発見、目標設定などに関するスキルであるが、今回の講義においても、成功体験を促す課題達成型の課題が設定されていたことや、自炊やテントでの宿泊などを通して、自ら課題を見つけ、対応していく機会が多かったことがスキルの獲得や醸成を促したと考えられる。

これらのことから、自然体験活動が大学生の社会的スキルの正の変容に影響を及ぼすこと、また自然体験活動の経験がその後のスキルの維持・向上に影響していることが示唆された。組織キャンプは、「ある目的を達成するために十分に準備され計画されたプログラムを持ち、野外でのグループ活動や共同生活を通して、キャンパーに対して楽しく創造的かつ教育的な体験の機会や場を提供するキャンプのことである。」と定義づけられ、2泊3日という短期間でのキャンプを含む自然体験活動においても、グループ活動や共同生活の中で、教育的効果があることが示される結果となった。

3. 自由記述レポート

講義終了後に行った「3日間を振り返って学んだこと」の自由記述レポートより、全体の大まかな傾向を探るために「頻出150語リスト」を作成した（表2）。

表2 自由記述レポートの出現頻度の上位150単語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	自然	369	51	音	39	101	ご飯	25
2	自分	308	52	気づく	38	102	暗闇	25
3	人	219	53	周り	38	103	驚く	25
4	感じる	205	54	川	38	104	行う	25
5	キャンプ	188	55	火	37	105	講義	25
6	学ぶ	166	56	作る	37	106	自信	25
7	班	146	57	他人	36	107	心	25
8	活動	143	58	多く	36	108	竹	25
9	協力	142	59	目	36	109	感動	24
10	生活	138	60	良い	36	110	手	24
11	今回	127	61	お互い	35	111	助ける	24
12	体験	116	62	特に	35	112	美しい	24
13	沢登り	116	63	挑戦	34	113	木	24
14	普段	106	64	夜	34	114	それぞれ	23
15	大切	98	65	アイスブレイク	33	115	身	23
16	出来る	95	66	水	33	116	成功	23
17	意見	88	67	登る	33	117	生きる	23
18	考える	84	68	難しい	33	118	グループ	22
19	仲間	80	69	学習	32	119	意識	22
20	知る	75	70	関わり	32	120	課題	22
21	たくさん	74	71	全員	32	121	学べる	22
22	見る	72	72	日常	32	122	技術	22
23	協力ゲーム	71	73	流れ	32	123	講座	22
24	経験	70	74	見える	31	124	耳	22
25	ゲーム	68	75	野外	31	125	終わる	22
26	今	65	76	ネイチャーゲーム	30	126	改めて	21
27	最初	58	77	違う	30	127	関わる	21
28	多い	56	78	機会	30	128	考え	21
29	参加	53	79	自身	30	129	出す	21
30	虫	53	80	自然体験活動入門講座	30	130	体験活動	21
31	達成	51	81	前	30	131	大変	21
32	行動	50	82	他	30	132	得る	21
33	本当に	48	83	力	30	133	役割	21
34	持つ	45	84	気	29	134	友達	21
35	大きい	45	85	使う	29	135	話	21
36	時間	44	86	相手	29	136	感謝	20
37	少し	44	87	強い	28	137	実際	20
38	信頼	44	88	必要	28	138	森	20
39	人間	44	89	聞く	28	139	進む	20
40	積極	44	90	目標	28	140	炊事	20
41	不安	43	91	話す	28	141	聞こえる	20
42	歩く	43	92	解決	27	142	慣れる	19
43	メンバー	42	93	出る	27	143	貴重	19
44	楽しい	42	94	成長	27	144	乗り越える	19
45	声	42	95	クリア	26	145	振り返る	19
46	コミュニケーション	41	96	ナイトプログラム	26	146	存在	19
47	初めて	41	97	一つ	26	147	非常	19
48	過ごす	40	98	行く	26	148	重要	18
49	関係	40	99	場所	26	149	人見知り	18
50	最後	40	100	様々	26	150	絶対	18

この時、「自分たち」「私たち」、「友達」「友人」といった意味が同じであるが、表記が異なるものについてはどれか一つに統合する作業を行った。また、「これ」「あれ」などの代名詞や「とき」「もの」などの形式名詞などについては分析対象としなかった。さらに出現傾向の類似をもとに

「共起ネットワーク」を作成した（図1）。この共起ネットワークは、出現傾向が似た単語ほど近く、似ていない単語ほど遠く配置され、距離の近さに応じてグループ化したものである。

記述全体としては、「自然」、「自分」、「人」、「感じる」、「キャンプ」、「学ぶ」、「協力」、「仲間」などの言葉が頻出単語として挙げられた。これらは、今回の講義が自然の中での仲間との協力、非日常体験であったことや、他者との関わりの中で、自己を見直す場や自己成長に繋がった場として参加学生自身が認識していることが要因として考えられる。記述内容からも、「どんな活動も最初は不安だったが、失敗や成功を重ねているうちにそれが自分の自信に繋がっていった」、「仲間とともに活動しなければならないことが多かったため必然的に仲間との団結力や信頼が深まっていった気がします。沢登りは仲間の支えがなければ、自分一人では絶対最後まで行くことはできなかった」、「様々な活動を通して、自分にはこんな部分があったと気付くことができた」といった言葉が受講生の振り返りとして表れていた。

さらに、共起ネットワークの結果から、「意見」、「協力」、「生活」、「活動」、「感じる」、などの単語を含む6つのグループが形成された。以下、の文中における“ ”は分析者による表現の補足であり、カッコ内な実際の自由記述レポートからの引用である。

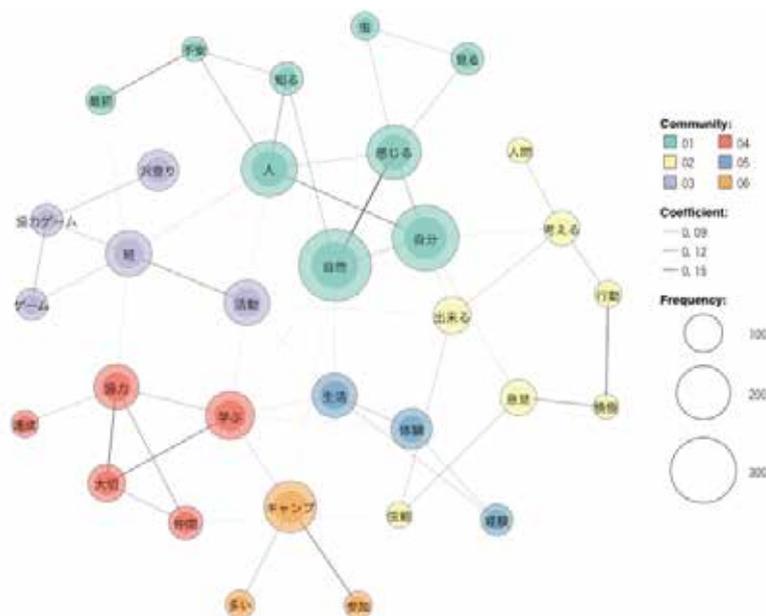


図2 自由記述レポート共起ネットワーク

それぞれをグループにまとめると、“最初”は“不安”であったが、“自然”や“他人”を“感じる”中で、“自分”を“知る”ることの大切さを学んだという「自己理解」（新しい自分を見つけられて感動した私はすべての活動を通してこの先、生きていくための技術や知恵を習得することができ、自分をもっと高く評価することができた、つまり自分の可能性について見つめなおすことができたと感じている。）、何事にも、他者を“信頼”し、“積極”的に“考え”、“意見”し、“行動”し、ことの大切さを学んだという「積極行動」（初めは恥ずかしくてあまり話せなかったが、活動を通して自分の意見を言ったり、困っている人がいた時は自然と自分から言葉や行動に出たりと、自分でも驚きだった。）、課題の“達成”などを通して“仲間”との“協力”することの“大切”さを学んだという「他者協力」（協力がなければどれも達成できないものばかりだったので、いかに仲間との協力が大事か良く分かりました。）、“沢登り”や“協力ゲーム”などといった、“班”での“活動”を通して、集団で活動することを学んだという「集団活動」（班活動を通して、与えられた役割を全うするという責任感を感じた。）、これまでの“生活”の中で“経

験”や“体験”したことの無い活動であったという「非日常体験」（普段は見ることのできない自然を見ることができたり、五感で自然を感じたり、新鮮な感覚を味わえた。・・・夜はこんなにも静かで、こんなにも星は綺麗で、こんなにも自然の音が心地良いのか知ることができて本当に良かった。）、“キャンプ”に“参加”して良かったという「満足感」（良い経験ができ、自分も成長し、素晴らしい仲間とも出会うことができ、本当にこの講義に参加して良かったと思います。）の6つのグループに分けることができた。

4. 自由記述レポートと社会的スキルの関連

自由記述レポートと社会的スキルの指標である「kiss18」の下位項目の内容を比較すると、参加学生の記述した5グループと社会的スキルの下位因子6項目において、関連が考えられた（表3）。

特に他者とのスキルに関する「初歩的なスキル」や「攻撃に代わるスキル」、「より高度のスキル」は、「他者協力」、「積極行動」の項目と関連し、講義での集団生活における他者との関わりを通して社会的スキルの獲得、醸成の自己認知を裏付ける結果となった。また、自己のスキルに関する「感情処理のスキル」や「ストレス処理のスキル」、「計画のスキル」は「自己理解」、「集団活動」、「非日常体験」と関連し、社会的スキルの獲得、醸成の自己認知を支持するものとなった。

表3 受講生の学びと社会的スキルの関連

参加者の学び 社会的スキル	自己理解 自己の可能性に気づく	積極行動 積極的に思考し行動する	他者協力 仲間との協力	集団活動 集団で活動する意義	非日常体験 未経験の活動	満足感 授業に参加した満足感
初歩的なスキル						
他者との会話や円滑なコミュニケーション		○	○			
より高度のスキル						
他者への依頼や謝罪			○			
感情処理のスキル	○					
自尊心や感情表現						
攻撃に変わるスキル						
他者とのトラブル処理、他者の援助		○	○			
ストレスを処理するスキル				○		
矛盾した情報の処理、集団圧力への対応						
計画のスキル	○	○			○	
問題の発見、目標設定						

これらのことから、野外体験活動終了後の自由記述レポートが、社会的スキルの獲得や醸成に寄与している可能性が考えられた。西田ら（2002）はキャンプにおける体験の内容として、他者協力体験（グループの人と仲良くしたことがあった）や自己開示体験（自分が思っていることを友達に伝えたことがあった）などがあることを報告している⁹⁾。これらのことから、様々な場面での他者と関わる機会が多い自然体験活動場面でコミュニケーションを促進させ、対人関係を円滑に進めようとする「社会的スキル」がキャンプ直後に獲得され、さらにその後の生活にも影響を与えた要因になったと考えられる。また、その後の生活に影響を与えた要因として、自由記述によるレポートを通して、振り返り言語化することで、その学びを深化させることができていたことが推察される。実際に学生のレポートからも、「体験後の振り返りをするということが重要であると思う。振り返りをするということは、体験活動を通して「自分のもの」にした事柄を言語化するということだ。その言語化するという作業が、知識を正確に理解し、自分の中で普遍的な知識にすることにつながるのではないかと・・・また、グループで振り返りをする中で、自分の体験と人の体験を共有し、自らが得た知識に幅を利かせることができる。」という記述が見られたことから、自由記述レポートが学生の社会的スキルの獲得、醸成に寄与している可能性が考えられ、今回の共通教育としての自然体験活動が受講生に対しより実践的な学びを提供する授業になっていたことが考えられた。

V. 結語

本研究の目的は、教養・共通教育科目「自然体験活動入門」受講者を対象に、社会的スキルの獲得を検討し、テキストマイニングによる分析を行うことで、実習におけるどのような要素が学生の社会的スキルの獲得に寄与しているのかを検討することであった。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 3日間の自然体験活動を通して、社会的スキルは有意な向上を示し、下位因子全6因子においてもキャンプ直後で有意な向上を示し、さらに「初歩的なスキル」、「感情的なスキル」の2因子においては、その後の生活でも有意な向上が示された。
- 2) 自由記述レポートの分析から、受講生の学びは「自己理解」、「積極行動」、「他者協力」、「班活動」、「非日常体験」、「満足感」の6つに分けることができ、社会的スキルとの関連から、5つの項目で関連することが考えられた。
- 3) 非日常体験としての自然体験活動の中で、他者との関係を築きながら様々な課題を解決していくという体験と、振り返りを通して「体験」、「観察」、「概念化」、「実験」という体験学習サイクルを構築し、さらにその体験の言語化することが、その後の生活場面における社会的スキルの醸成に寄与している可能性が示唆された。

本研究の結果から、他者協力の場面が多い自然体験活動において社会的スキル向上の有効性が示され、また自由記述による主観的なレポート分析からも、受講生の学びは教養教育として求められている力の醸成に有効であることが示された。今後の課題としては、本研究の振り返りで用いた自由記述レポートの作成テーマが社会的スキルに絞ったものでなかったことから、社会的スキルの獲得に焦点を当てたレポート課題の設定を行う必要がある。また、学生が得た学びをより深く探るべく、様々な焦点に絞った検討を行う必要がある。

参考文献

- 1 経済産業省社会人基礎力 (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>) 2018/08/07アクセス
- 2 VIEW21』大学版2011年度 特別号 Vol.1 再構築が迫られる大学の人材育成システム2011, pp6-pp10
- 3 教育心理学研究, 2008, 56, 81-92就学前児の社会的スキル—コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討—高橋雄介 田謙介 星野崇宏 安梅勅江)
- 4 文部科学省大学審議会「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について (答申)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315960.htm) 2018/08/25アクセス
- 5 文部科学省中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像 (答申)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm) 2018/8/30アクセス
- 6 文部科学省中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について (答申)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm) 2018/9/12アクセス
- 7 公益財団法人日本キャンプ協会、キャンプディレクター必携 第1章キャンプと社会「社会におけるキャンプの役割」 pp1-pp8
- 8 吉田充 (2009) キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響、國學院短期大学紀要24、3-14
- 9 西田順一, 橋本公雄, 徳永幹雄, 柳敏晴, 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果, 野外教育研究, 5(2), 2002, 45-54

- 10 吉松梓「アウトドア」の授業が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響：授業アンケートとレポートの分析を中心として、駿河台大学論業50、143-157

Abstract

A Study on the Effects of “Nature experience activities” as Liberal arts Education
- Qualitative consideration by free description report -

Kawabata Kazuya, Fukumitsu Hirotaka

key words :

Liberal arts education, University Physical Education and Sports, Social skill, Outdoor Education, Text mining

In recent years university education, it is necessary to foster skills that are smoothly related to others. The importance of liberal arts education has been proposed as a subject to foster such skills.

Nature experiences are expected to be effective as countermeasures to various problems of contemporary youth. Also, rich experience activities may influence the acquisition of various skills.

The purpose of this study was to consider acquiring social skills for the participants in the liberal arts education subject “Introduction to nature experience activities” .

The findings obtained from this program could be summarized as follows:

- 1) Through 3 days of nature experience activities, social skills showed a significant improvement. In addition, the two factors showed significant improvement even in later everyday life.
- 2) From the analysis of the report, students’ learning could be divided into six, and related to social skills in five items.
- 3) The students had experienced building relations with others and solving various problems. Inside of that, they built an “experiential learning cycle” through reviewing. Languageization of experiences was meaningful in later everyday life to build the social skills.